

順正寺報第24号

報恩講 御案内

秋冷の候、皆様には御健勝にお過ごしのことと存じます。

さて、例年の通り『報恩講話』を左記により厳修致します。

宗祖『親鸞聖人』の徳をたたえ、念仏相続の御先祖の御陰を偲びお勤めする大切な行事です。

お知り合いの方、家族、友人、皆様にぎにぎしくお誘い合せて、万障繰合せの上御参詣下さい。

記

十一月二日 (△金…文化の日)

午後一時より

読経 (衆僧供養)

法話 (講師・京都 即成寺 江口 貫裕師)

おととき (お膳) 以上

順正寺 住職 江口 貫 照

『報恩講』というのには、親鸞聖人の御恩に
 報いるというところからスタートしているの
 ですが、「恩に報いる」という事は、「恩」
 を実感しなければ「報いる」という行動は起
 きてこないのです。
 今の世の中では全て自我が優先して、人様
 の御恩、親兄弟から受けた恩に気が付く人は
 少ないようです。「恩」という感覚は自らを
 見詰めるところからスタートする。「誰かか
 ら何かをされた」というところからスタート
 しては恩を感じる事は出来ない。自分の
 中にある、生命、肉体、自分の全てをじっくり
 と見詰め直す。そうするとその中に親から
 受けたもの、周りの人々から頂いた、色々な
 思い、知識、文化、そういうものが見えてく
 るはず。それを取り入れ、受け入れたの
 は、「私」かもしれない。が、それを「取り
 入れ、受け入れてくれ」という願いがあった
 始めてこちらが受けられるのである。自分が
 賢いから「それ」を受け入れられたなどと思
 ったら大きな間違いである。小さな子供が
 父母を、「お父さん、お母さん」「パパ、マ
 マ」と呼ぶ時、その呼び声は、「パパと呼ん
 でほしい、ママと呼んでほしい」という親の
 願いがあって、初めて出てくるのである。自分
 から賢く、気が付いて、「パパ、ママ」と呼
 んでいる赤ん坊などいらないのです。スタ
 ート・ラインを見て下さい。そうすると、自
 分に、「お父さん、お母さん」と呼ぶことを
 教えてくれた親の恩がそこにある。「呼んで
 ほしい」という「親の願い」があって、始め
 て「パパ、ママ」と呼べるのです。
 という事が解つてもらえらると思ひます。

△口 堂手

還暦を機に感ずる所

住職 江口 貫照

私はこの十月九日を迎えて、満六十才の年を数えるに至りました。俗にいう還暦です。還暦というと、字の解釈から、十干十二支の積み重ねで、もとの生まれたときと同じ干支になるという事らしいです。一般には、赤いチャンチャンコを着て、お祝いをしたりするようでした。しかし、現今では、還暦というのはそれ程もてはやされておるわけではない。と、いうのも、日本は現在、長寿の国と言われるようになってきております。六十はおろか、七十、八十、九十まで長生きする人も沢山いらっしやいます。社会的に言うくと、還暦と言うのは、まだまだこれから後、人生がウンとあるように捕らえられております。だから、さほど祝いごととしては重要視されていないようです。

ここで、自分自身の中で見詰めますと、これは、確かに一つの節目としては大きな意義

があると思います。

私は幼少の頃より、あまりからだが丈夫ではありませんでした。母の私によく言ってくれた話によると、お産婆さんが私が生れた時に、『この子は成人しないで終わってしまうだろう』と言ったほど、小さくて弱かったようです。今日まで生き長らえてきたのは、あの意味では自分だけの事かも知れませんが、不思議と言うより、言い様が有りません。

もっとも、二、三度の大病を患い、『これま
でか』と思うような事もあったようですが：
寿命と言うのは、（いつも自分自身に、又、
人様にも申し上げているのですが）与えられた
定命（定められた命）というものがあって、
『それが尽きるまではあるのだ』と、身をも
って体験しているという、そういう事なのか
もしれません。

さて、前置きが長くなりましたが、還暦を迎えて感慨に耽ったのは、やはり母の事であり、我が身自身の上で言えば、今生に命を授

けられた意義。人間はこの世になんの為に生まれてきたのかということであります。

この、丁度、十月九日に、京都のあるお寺からの紹介だということで、お通夜に招かれました。行ってみると、その、紹介してくださったお寺の御住職のお父様という方が、私が小さい頃から師事した、お経の先生だったのです。東京へ参りました、現在、僧侶として毎日の暮らしを続けているわけですが、この私に僧侶に成るように願ひ、そして、そのように育ててくれたのは、申すまでもなく私の母です。その母が、『お経だけは正式に、しかも、一番いい先生に就いて習いなさい』という事で、兄と二人で通わせてくれたのが、その、京都のお寺の御住職の下でした。御本山（東本願寺）の御経の先生の中で、今の言葉に変えていうとナンバー・ワン。多田周巖しゅうげんという方でした。

私の父は、先の戦争でフィリピンで戦死しました。そういう事もあって、兄も、私も、

小学校の頃から、お檀家へ、月参りに、毎日、出歩いていました。衣を着て外へ出るのが、まだ小学生だったものですから、大変、恥かしかつた記憶が在ります。特に、同級生の女の子なんかが前方から来ると、急いで路地に隠れたりした、甘酸っぱい想い出もあります。でも、そのうち、何時とはなしに、行った先々でお檀家の方々から、『ボンちゃんのお経は有り難い』と言って褒めて貰えるようになってきて、そういう事が重なってくると、お経を勤めることじたいが、ある意味では楽しいというか、そういうふうになっていきました。

今にして思えば、たとえお世辞でもそう言われたのは、『僧侶となってくれ』という願ひから、一流の先生を就けてくれた母と、その母の願ひを汲んで、この私に一生懸命、ひもとき、教えてくれた先生があつたればこそなんです。それが、今、私の一番大きな財産と言っても良いんじゃないでしょうか。

お経の練習では色々な事を指導されたのですが、何時も心掛けなくてはならないことは、基本として、『坊主は背中でお経を読め』という事でした。どういう事かと申しますと、皆さん方のお宅の仏壇に向って私はお経を読むのですが、『後ろを参って下さっている方の念いを背中で受けて、前に声を出せ』と、こういう意味だったわけです。

又、声を出す場合ですね、お勤めをする場合の心構えとして、

柔らかきは良い、が、弱きは悪し。

強きは良い、が、剛こわきは悪し。

静かなるは良い、が、したたるは悪し。

緩ゆるかなるは良い、が、ねばるやのは悪し。

進むのは良い、が、せわしいのは悪し。

軽やかは良い、が、そまつなのは悪し。

と、いうことをよく言われました。一見、同じような事なのですが、いずれも、いずれも勤める側の心で決まる事なのです。

世の中の事柄というのは、そういう事が多

いのではないのでしょうか。日常の暮らしの中で、同じ事をしていくんですけれども、そのしている事の中に心がどの様に作用しているかということによって、その事が回りの人に楽しく、あるいは美しく、又、あるいは深く作用していくのではないかと、それを何時も感じていきます。

こうした、僧侶として、親として、夫として、そして、人としての日々の暮らしが、私に生きる事の意義というものを教えてくれているのかもしれませんが、そういう意義を自問自答するわけです。

自分自身の上でいえば、私はこの世に仏法に会うために生まれてきたのだという事です。そして、仏法に会った喜びを抱きつつ、浄土へ帰って行けるといふ、そういう御縁の不思議さを感じているわけです。

坊主の台詞ですから、いかにも坊主臭く聞こえるかもしれませんが、やはり、法の真実に触れる事の難しさという事を感じれば感ず

るほど、仏法に会ったことの喜びという事が、大きく、心の中に広がっていきます。

仏様の教えに会う事の難しさというのは、寺に生まれて、寺に育って、特に痛感するところなのです。何故かと申しますと、朝から晩まで仏様の世界に置かれているという身でありながら、思うこと、成すことは、自我の、三毒さんどくの煩惱の毎日である。

(三毒とは、次の、三つの煩惱のこと。

貪欲とんよく：自分の情に適するものを貪むさぼる事
瞋恚しんい：自分の情に適さぬものに恨み、
憤る事。

愚痴：ものの道理をわきまえぬ愚かな事。)

奇しくも、親鸞聖人が晩年に歌われた和讃の中に、

罪障 功德の 體たいとなる

水と 水のごとくにて

水多きに 水多し

障り多きに 徳多し

と、おっしゃっています。単に、人に聴いて頂くための詩ではなく、親鸞聖人自身の自嘆というか、自らの嘆きと、喜びであったのであろうと、自分の心の中に響かせて頂いているわけです。

妻の事、息子の事、娘の事、孫の事。あるいは又、回りの人々の事。考えれば考えるほど、思えば思うほど、自分の心を波立たせている。と、思っている自分の心こそが、そういう捕らえ方をする事によって波立つのであり、けっして、妻、子、孫が私の心を乱しているのではない。そう受け止めてしまう自分自身の心が貧しいがゆえに、欲が深いし、悩み大きいゆえに、波立っているのだ、と。そういう毎日を送ります。そうすると何処からともなく、その身そのまま、念仏を称えてくれという仏の願いが届いて下さっておる。例えば、お経を勤めることによって、私自身の口から、『南無阿弥陀仏』というお念仏の名号が必ず、お経の中に含まれていて出て下

さる。これは、称えなきやならんとか、称えましようという、そういう意識ではなく、意識に関係なく必ず出て下さる。その時、その念仏の出てくださいったことに感動し、こんな私にも、『念仏称えてくれ』という仏の願いが、届いているのだという事を、実感させてもらっているのです。

『オギャー』と生まれた子供が、頭が良くて、賢くて、自らの意識の中で、『あー、これが私の両親である。母だ、父だ』と認識して、パパとかママとか口から出して呼ぶ、声を出すという事は有り得ないのです。育ててくれる親が、『パパ、ママと呼んでくれ』という願いを目も見えぬ、言葉も解らぬ赤子の時から、抱きかかえて、呼び掛け、呼び掛け、願ってくれていたからこそ、子供は、赤子は、ママとかパパとか、その願いに答えて、知らぬ間に口から言葉を発するのではないでしょうか。同じように、『あー、こういう時には念仏を称えにゃいかん』と思うて、南無阿

弥陀仏と称えているように感じているのだけれども、実は、そういう念仏の中に『称えてくれ』という願いがあったればこそ、今、出てきたのだという認識が、特に、この頃、強く感ずるのです。

宗祖親鸞聖人は、六十の還暦の年をへて、ある意味では妻子を捨て、関東から京都へ帰っていかれました。親鸞聖人の人生、何度かそういう意味では、出家という言葉がございしますが、（今、オウムなんかでもよく出家などと言っておりますが、）一つの転機と申し上げて良いでしょう。そういう転機が何度か、親鸞聖人の人生の中に見られます。が、一番大きな転機は、私は、何と言っても、妻子を置いたまま京都へ帰っていった、あの時だと思っています。なぜならば、若いうちならば、まだまだ自分の人生がこれから、どの様に開けて行くか、不安と同時に期待も持てるはずですが。希望もある。そして、なによりも、『まだまだ生きられる』という、気力も

体力も有るものです。我が身自身が六十になつて、後、何年生きられるかという事を人に聞かれ、あるいは、自分自身に問うてみて、十年、二十年生き長らえる事ができるといふ、そう言い切れるだけの自信もない。まして、今と違い、平均寿命も短かった、あの鎌倉時代の事ですから、六十にもなっていられれば、おそらく、自分の人生の行く末として、後何年生きられかという予測は、一年、五年、せいぜい長く見ても十年というところが限界じゃなかったでしょう。それを承知の上で、山坂越えて、何十、何百里の道を京都へ帰っていったのです。それから後の京都での三十年間というものは、家も持たず、扶風馮翊ふふうほうよくという言葉で伝えられています。扶風馮翊ふふうほうよくというのは一定の所に定住しないという事です。家も持たず、御縁の有った方々の助けを借りつつ、著作に励んで行かれた。これは、本当に、毎日毎日が、一日一日が自分の人生の最高であり、輝きである。そういう暮しをして

いかれたというようにお見受けするのです。とても、そこまではいきませんが、私に与えられた、これからの人生は、今まで通りとちっとも変らない毎日に違いのないのでしようが、その中で一声でも多く、私の口から、『南無阿弥陀仏』という如来の呼び声が、ついて出て下さるような暮しを重ねたいと願っています。

順正寺がこれから後、二代、三代、四代、五代と続いて行ってほしいという、そういう願いは持っておりますが、これは、単なる俗世間での願いということになるのかもしれない。

平成七年十月九日

△口 堂手

平成七年度 年 回 表

一	周	忌	・	・	・	平成	七	年
三	回	忌	・	・	・	平成	六	年
七	回	忌	・	・	・	平成	二	年
十三	回	忌	・	・	・	昭和	五十九	年
十七	回	忌	・	・	・	昭和	五十五年	
二十三	回	忌	・	・	・	昭和	四十九	年
二十七	回	忌	・	・	・	昭和	四十五	年
三十三	回	忌	・	・	・	昭和	三十九	年
三十七	回	忌	・	・	・	昭和	三十五	年
五十	回	忌	・	・	・	昭和	二十	二年
百	回	忌	・	・	・	明治	三十	十年

右に記しました通り、来年、平成八年の年会法要は執り行ないます。法事の申し込み、ご相談のある方は、御遠慮なく、ご連絡ください。

「白色」白光の会」御案内

十一月の「白色白光の会」は、左記の通り執り行ないます。

記

◎日時・十一月二十日(月) 午後一時ヨリ

◎会処・順正寺本堂

新規会員も随時募集しております。詳しくは当寺までお問い合わせ下さい。

修正会(お初座)の御案内

例年通り、修正会(お初座)を、左記の通り執り行ないます。ゲーム有り、お汁粉(住職お手製)有りの楽しい一時にする予定です。どうぞ、お誘いあわせての御来寺を、一同、楽しみにお待ちしております。

記

日時・平成八年

十一月七日(日) 一時ヨリ

場所・順正寺本堂
おしるこ・ゲーム等 以上

☎ 177 東京都練馬区石神井町三の十七の四

☎ 03 (3996) 2064

FAX 03 (3997) 8117

順正寺